

ビキニ被災支援 ニュース

室戸の会

2022年4月02日 No.42

発行 ビキニ被災を支援する室戸の会 太平洋核被災支援センター
連絡先 事務局 宿毛市 088-066-1763(山下) 室戸の会 0887-35-8725(濱田)



ビキニデーin 高知 2022

室戸フィールドワーク実行委員会 第1回報告

3月19日、コロナ感染症の影響で伸ばし伸ばしになっていた室戸実行委員会が室戸「やすらぎ」でおこなわれました。参加者は元船員さん3人を含め13人でした。

内容は、それぞれ自己紹介の後、濱田から「ビキニデーin 高知」の取り組みの経過と今年度は、ビキニ事件はどのようなものだったのかということとともに、核実験の持つ影響や「核兵器禁止条約」についても考えていきましょう、と今年度の取り組みのねらいについて提案がありました。

会議では、主に「パネルディスカッション」をどのような内容でやっていくのかということについて話し合われました。以下、話し合われた内容を紹介します。 ※◎元船員 ○参加者

○司会

- ・こんなことを話してもらいたい。また、当時の状況など紹介してください。

◎K

- ・自分らはまだ学校でたばかりでよくわからなかった。築地に着いたら、別の船に乗せられてガイガーで測られた。

◎O

- ・特に手袋から放射線は出た。バリバリ言っていた。その他に船のビン玉、マストなどからもバリバリと反応があった。魚を捨てなさいと言われて、沖まで行って捨てた。

○M

- ・操業の期間はどのくらいだったのですか？
- ・苦労して獲ってきて、放射線の数値を測って捨てるように言われて。どんな気持ちでしたか。

◎O

- ・配当がなかった。普通ならそこそこあるはずだが。船主のところに行くとなんか金のようなわずかな金額をもらった記憶がある。
- ・当時はあまり、ビキニビキニとは言わなかった。自分は4~5年乗ったけど、その後は商船に乗っていた。ビキニのことなどすっかり忘れていた。

岡の仕事に変えていたころに山下先生と高校生四、五人が来て話を聞かせてくれてといわれて思い出した。

- ・海福丸は150t位。1か月か2か月くらい操業していた。

◎K

- ・幹部の人からは、雨が来たら帽子をかぶれ、合羽を着ると言われていた。福竜丸のことは無線で連絡があっていたのだろう。そのこと以来、マーシャルの方は避けて南に下がって操業していた。

◎O

- ・海福丸も、パラオの方に行っていた。

○N

- ・体の調子などはどうですか。因果関係などはどのように考えていますか。

◎O

- ・歯ぐきから血が出たことがあった。医者に被爆との関係があるかと聞いた時に、あるかもしれないといわれたことがある。あと、痔、盲腸を患った。心臓が悪く WTW 症候群と言われて、突然心臓が暴走し始めたりする。しかし、因果関係があるかないかはわからない。わからない

けど、自分の中にはかすかだけどあると思う。同じ部落の出身でマグロ船に乗ったものが5人くらいいるが3人くらいはガンになっている。若くして死んだ者もいる。

◎K

・胃酸過多で入院したことがある。2014年の時に血液検査では……。田中公夫先生に診てもらった。

◎Y

・2014年の時の検査の時に検査してもらった。自分は非対称の10人として血液を検査したが、私も呼び止められた。検査結果については、素人が見てもわかる。しかし、結果は本人にしか分からない。

◎K

・室戸はマグロ船で持っていた。一年過ぎると話をしなくなった。話をすなという感じだった。抑え込んできたということがあるのではないか。

◎H

・ビキニ事件は歴史的に大きな事件◎今振り返ったとき、若い人たちに伝えたいことは。

◎O

・核は人間の力で制御できない。そういうものを人間が扱ったらいかん。核について真剣に考えていってもらいたい。

◎K

・なぜ、政府が力を入れてくれなかったのか。当時はわからなかったが、今はそう思う。補償は福竜丸だけだった。

◎N

・福島原発のこともある。被ばくを言いにくいということも思う。行政が調査をしようとしないうことには怒りを感じる。

◎H

・伝えられてきていないということについて、地元の人たちはどのように考えますか。

◎N

・室戸で育ってきたけど、伝えられていない。親からも聞いたことはない。断片的に仕事の中で聞くことはある。学校で習ったこともない。その意味では自分が情報や事実を取りに行く(調べて行く)必要があるのだと思う。

◎K

・それも、僕の思いだが、マグロで栄えた町というもある。僕らも被ばくしたといわれたら腹

が立つ。マグロ船が無くなったら、栄えなくなる。自然とみんなが隠した。

◎H

・自分たちも隠したというか意図的に言わなくなったという感じはあるのですか。

◎K

・「そういうことは言うなやと」と言われたりもした。そんな感じで自然に言わなくなった。

◎H

・今の70代くらいの方は、久保山さんの娘さんに手紙を書いたりしている。その後が切れているのではないか。

◎Y

・先輩の船員が捕鯨船に乗ってきたことがあった。顔の左半分から反応があった。

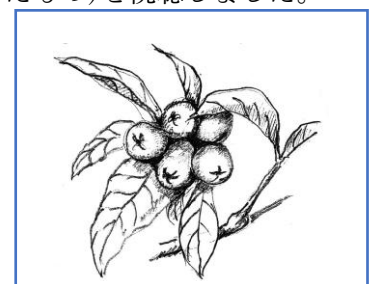
・灰が降ってきたのをスコップで救った。それを枕にして寝ていた。鯨が撮れた祝にビールが出た。すると、その人が狂ったように暴れだした。その人は清水に帰って小釣りの船で亡くなった。

・人にも言えず無念のうちに死んだ人が沢山いる。被ばくをしたかもしれないのに「いうないうな」と言われて死んでいった。その無念をはらせたらとおもう。

・福島の子どものたちの甲状腺の異常、国はたいしたことはないというけど、それは違う。国はそういう調査をちゃんとして対処すべきだ。

・西の方ではいろいろやっているのに、この室戸のおひざ元でできていない。福竜丸展示館に縄とピン玉を展示してもらおうようにした。そのシビ縄からわずかだけ放射線検出された。そんな危険なものだ。それを、今どこかの国は持っているぞと自慢している。愚かなこと。そういう時だから余計に、室戸のことだけでなく、コンマイもんだというのまではなく、大きな世界の課題だという観点で頑張ってもらいたい。

※最後にDVD「ビキニはまだ終わっていない」(県シンポ用につくったもの)を視聴しました。



高知県マグロ船主組合が「ビキニデーin 高知 2022」の後援団体に

高知県マグロ船主組合に対し「ビキニデーin 高知 2022」の後援を依頼をしたところ、快く後援をしてくださるとのご返事をいただきました。3月10日に改めて事務所を訪問しました。

船主組合事務所はレトロな趣のある建物です。組合長の山本巖さんにお話を伺いました。

○※ビキニデーのチラシを見ながら、会の趣旨を説明し、そのあと懇談しました。

ビキニ近くに行った船は被害も大きい。フィリピンの東の海域はビキニから離れているからと何度も何度も漁に出ていることもあり、とても心配している。

◇組合長

- ・ビキニのころのことはあまり伝えられていない。多分その頃は、食べるに精一杯でとにかく漁に出て、たくさん魚を獲ることが第一だったのではないかと思う。実際、資格を取って腕を磨くこと、漁場を開拓することなど競争だったと聞いている。
- ・自分の先代は別の問題だけど、とても苦労している。(中略)船員は近所の人たちだし、その人たちの命と生活を預かっている。

○そうだろうと思います。20年くらい前に話を聞きに船員さんのところを尋ねたときに、「船主さんに迷惑が掛かりますので・・・」という言い方をよく聞いた。ビキニ事件は、船員も船主さんもみんなが被害者だと思います。魚も売れなくなったし、船員の健康被害もある。そして国は何の補償もしていない。

◇組合長

- ・健康被害もあったんだろうと思う。

○今のマグロ漁の課題はどのようなことでしょうか。

◇組合長

- ・現在、高知県の船主は4名。マグロ船は10隻。船員数は、一隻に日本人が6人、外国人が20名。全部で260名ということです。
- ・ミナミマグロやクロマグロは資源管理をしてきたので、資源は回復してきている。人材育成と後継者をどうつくっていくかが課題。それが大きな仕事と思っているけどなかなかできていない。



○福島原発の汚染水の海への排出問題なんかはどう考えられていますか。

◇組合長

- ・あれは勘弁してもらいたいね。自分たちの遠洋漁業の漁場は、大西洋の方が主なので直接は関係ないけど、どこで起こっても同じ。
- ・今のウクライナの件も、核を持って良い国が五つあるというのもげせん。

○ほんとにそう思います。これからもよろしくお願いします。

ビキニ被災風化させない

県シンポ データ積み上げが重要

県健康対策課が主催するビキニ水爆実験被害を風化させず、被災した元船員に寄り添う「放射線シンポジウム」が12日、高知城ホールで開かれまし

家保英隆・県健康政策



下本、濱田両氏も参加したパネルディスカッション(3月12日)

た。集会ではビキニ海域で被曝した被災船員の救済策実現のために官民でデータを積み上げていくことの重要性が確認されました。

部長のあいさつに続き、被災船員遺族の下本節子さん、空言地区で被災船員の聞き取り調査に取り組み濱田郁夫さんが発言に立ちました。

下本さんは胆のうガンで亡くなった父親をはじめとする空言の被災船員の実情を報告し、「日本は核兵器禁止条約に署名すべきだ。核実験の被害者である船員と遺族の声を傾けてほしい」。

濱田さんは太平洋海域での核実験は1946年から63年まで140回を超え、54年3月には多くの空言の船が極めて放射線量の高い危険海域に20日間もどまり船員が大量被曝したこと、フィリピン東方海域にも多くの船が入っているが、資料が乏しく実態が不明であり早急な調査が必要である

ことを述べました。廣橋伸之・広島大学教授(原爆放射線医学研究所)は基調講演で放射線の人体被害の基礎知識と放射線災害への備えの重要性を強調。鎌田七男・広島大学名誉教授は第五福竜丸船員、黒い雨に打たれた広島市の被爆者、空言の被災船員、福島第一原発被害者の調査結果等を踏まえ、内部被曝の影響を重視する必要があると、被ばく者の定期的な健康診断が大事だと指摘しました。

講演後、川内敦文・県健康対策課長をコーディネーターに発言者を変えたパネルディスカッションが取り组まれました。本集会は被災船員と遺族の支援に取り組み「太平洋核被災支援センター」らが開催を求めたもので、関係者の努力もあり、被災船員に真摯に向き合い、再び放射線被害者を出してはならないという県としての姿勢を示す画期をなす取り組みとなりました。

放射線被ばく理解深める

高知市 船員遺族らシンポ

放射線被ばくの影響を学ぶシンポジウムが、このほど高知市内で開かれた。米国によるビキニ環礁の水爆実験で被ばくした船員の遺族や、大学教授らが健康被害について報告した。

率が高く(県内漁船員が乗り込んでいた『第五明賀丸』では船員の約7%ががんを発症した)と指摘した。下本さんは「元船員の中には孫の障害はないか」と長年苦しんでいる人がいた」と述べ、「今、日本がしなければいけないことは核兵器禁止条約に署名をすること。核実験の被害者である元船員と遺族の声を傾けて」と訴えた。

濱田共同代表は「ビキニ環礁で被ばくした元船員の父をがんで亡くした下本節子さんと紹介。同市の

広島大学原爆放射線医学研究所の広橋伸之教授は、放射線の人体への影響について「筋肉や神経は影響を受けづらいが、血液や骨髄は影響を受けやすい」とし、「放射線は臓器にどどまり、何年もかけて病気になる」と説明した。



放射線被ばくについて理解を深めたシンポジウム(高知市丸ノ内2丁目の高知城ホール)

県健康対策課が主催し約30人が来場。オンラインでも公開された。(井康弘)